

# 牲幣を埋める祭—古代中国の場合—

横 田 健 一

古代中国人は祭祀の対象によって、祭り方を色々と変えた。『周礼』は、周代の官職制度を記した礼の書物とされているが、果して周代の制度を忠実にしるしたものか否か、疑問がある。しかし、戦国から漢代に周代の制度を理想化して、これを官職制度の模範として、描き出したように思われる。そうした点を顧慮したとしても、周代の制度ないしは、その伝統をひく、中国中古の祭祀制度をうかがう史料となし得るであろう。

『周礼』巻18「宗伯礼官之職」大宗伯の条によると、「昊天上帝は禋祀をもって祀り、日月星辰は実柴をもって祀り、司中、司命等の星や風師、雨師（風や雨の神）は禋燎をもって祀る」としている。このように天帝をはじめ、日月星辰や、特に重要な司中、司命のような人間の運命を司る星、また風雨神は、柴を積み、焚き、犠牲の獣や玉や帛のような幣帛、祭物は火で燃やして、煙を立ちのぼらせて、祭りを行ったのである。

これに対して、前文の次に、「社稷と五祀五嶽は、血祭をもって祭り、山林川沢は埋沈を以て祭り、四方百物は、副辜を以て祭る」としている。

社、稷は土地の神と穀物の神で、血祭とは、むろん犠牲の獣をさいて、その生血を土地や穀物の神の木主（神体）または、その土地の上にそそいだものであろう。五祀五嶽のうち五嶽は、中国の東西南北と中央にある五つの高い名山で、東は泰山（山東省）、西は華山（陝省）、南は衡山（湖南省）、北は恒山（山西省）、中は嵩山（河北省）である。五祀は『礼記』月令によると、1年間に行う五つの祭、すなわち、春は戸、夏は竈、秋は門、冬は行（または井＝『白虎通』の説）そして季夏（6月）には中霤すなわち室中の神を祭ったとされる。ただし五祀は太古の五帝、または木金水火土の五行、五徳を指すともいう。四方百物の祭りは、犠

牲の獣の胸を裂き開いたのである。

さて問題は山林川沢の祭に埋と沈をもって祭るということである。すなわち山林の神霊を祭るには、犠牲・幣帛を地中に埋め、川や沢の神霊を祭るには犠牲や幣帛を水中に沈めるのである。後者については、日本でも奈良、平安時代に丹生川上神に旱の時には黒馬を、長雨の時には白馬を奉つて、降雨または止雨を祈った例は、多く見られる（六国史）。むろん馬の他に幣帛も奉られた。

中国の山川の祭で、更に興味深いのは、兵器をもって幣帛、祭器としたことである。すなわち『周礼』巻19「宗伯礼官之職」肆師の条によると、この官の職掌は、大宗伯をたすけて国祀の礼を立てることにあるが、その中に、「およそ、師甸には牲を社に用い、宗には則ち位を為し、上帝には類造し、大神には封じ、兵を山川に祭ること、またかくの如し」とある。兵とは兵器、刀や矛、弓矢など攻撃用の武器である。

師甸（田に同じ）とは、軍隊を戦争に出動させることと、狩猟をすることで、狩猟は軍隊の平時における演習の意味があった。このように軍隊を動員する時には、社＝土地の神に犠牲をささげ、宗廟には天子が参拝し、上帝に対しては郊祀を行う。すなわち天子が夏至ならば北郊で、冬至ならば南郊で天を祭るのが郊祀、類礼である。大神を封ずることは、社の神と五方の神に壇を設けて祭ることである。そして特に興味深いのは、山川は軍隊の依り止まるところであるから、兵器を奉って祭るのだという。

前にみたように、山川の祭には、犠牲や幣帛、祭器は埋めるか沈めるかするというのであるから、山の場合には、兵器を埋めたことになるのではあるまいか。

前述の「血祭を以て社稷五祀五嶽を祭り、狸（埋）

沈を以て山林川沢を祭る」の条の注に「地を祭ると言わざるも、これ皆地祇なり、地を祭ること知るべきなり。」地祇はすなわち大地の神で、山川の祭について、『周礼』『考工記』の玉人の条に、天子の巡守、すなわち国内巡行の際行われる祭に、璋と呼ばれる玉製の酒器を使用することが記されている。「大璋中璋九寸、辺璋七寸、射四寸…（中略）天子以て巡狩し、宗祝以て馬を前む」条の注に、「三璋の勺、形圭瓚の如し。天子巡狩し、事山川に有らば、則ち灌を用う」天子が全国を巡る時に、山川を祭るのに四角い玉を半分に分った柄のついた、（射とは柄のこと）で酒を尊から汲んで、山川に灌（そそ）ぐのである。次いで「大山川には大璋を用い（璋に）文飾を加うるなり。中山川には中璋を用い、文飾を殺す（飾らない）なり。小山川においては、辺璋を用う。これは半ば文飾するなり。それ沈を祈るに馬を以てす。宗祝（宗廟をつかさどる祝＝神官）勺（杓）を執り、先の礼を以てす。玉、大山川を過ぐれば、則ち大祝、事を用う。将に事四海山川に有らんとすれば、則ち校人は黄駒を飾る。」とある。

黄駒を飾って、川に犠牲として沈めるのであろう。

前条から二条を置いて「牙璋、中璋七寸、射二寸。厚さ寸、以て軍旅を起して又旅し以て兵を治め守る。」とある。旅は軍の単位であるがここでは山川、特に山を祭る祭祀をいう。軍隊を出動させる時にも、山神に酒を灌ぎ祭り、兵器を治めととのへて守った。というのである。

その三行後には「兩圭五寸、邸あり、以て地を祀る。以て四望に旅す。」とある。これは四角い玉の五寸の長さのものの、四隅に邸、すなわち突出のあるものを、地に埋めて、地の祇（かみ）を祭り、その後、四望（五嶽、四鎮、四瀆（かわ＝河川））に対し、遙かにのぞんで、祭を行った。というのである。

望の意味について、『尚書』の「禹貢」篇の「蔡蒙旅平」を孔安国の「伝」（注釈）に「山を祭るを旅という」とあり、『論語』「八脩」に「季氏旅於

泰山」の「集注」に「礼、諸侯、封内の山川を祭る」とあって、旅も望も山川、とくに山を祭る意味がある。なお四鎮の鎮は、毎州の鎮めの山で、『尚書』『舜典』の孔安国の注に、「毎州名山、殊に大なる者、以て其の州の鎮を為す」とある。

山川の祭に特に興味の深いのは、祭の舞に兵器を持って舞うことである。

『周礼』『宗伯礼官之職』楽師・条に「凡そ舞に帔舞有り、羽舞あり、皇舞あり、旄舞あり、干舞あり、人舞あり」とある。帔舞は社稷の祭や全部の全羽を持って舞う。羽舞は析羽すなわち割いた羽を持ち、皇舞の皇は鳳凰の意であるが、五彩の羽で作った帽子を冠って舞う。旄は牛の尾を持って舞う。干舞は楯をもって舞う。人舞は素手で何も持たず、宗廟で行う手ぶりの舞である。

この干舞こそは、「山川には干を以てす」と注するように、山川の祭には楯をもって舞ったのである。わが崇神紀九年三月条に、天皇の夢に神人がおしえて「赤盾八枚、赤矛八竿をもって墨坂の神を祀れ、黒盾八枚、黒矛八竿をもって大坂神を祠れ」とあり、四月にこの教のように黒坂、大坂の雨神を祭ったとある。これは大和の原初の皇室領の東境の宇陀墨坂、今の榛原では、日の出の方なので赤色の兵器、大坂は、皇室領の西方、日没の方角なので、黒色の兵器を、おのおの坂の神にたてまつって祭を行ったのである。こうした記事の成立は、何を史料にしたか不明だが、崇神時代に、古代中国の兵器を以て山神を祭る思想が入っていたか、あるいは『書紀』編者に、古代中国の山神の祭に兵器を用いたとの思想の影響があったのか。いずれにせよ山神に兵器を埋めて祭ったのであろう。

なお、日本でいえば、今年四月に橿原考古学研究所附属博物館で催された伊勢神宮神宝展に、出陳された、鎌倉時代と室町時代の二振の玉繩太刀は、地中から出土したものであった。祭が終わってから埋められたものと推定されている。